

# 目次

プロローグ	5
前編 少年の日々	9
第一章 たらちねの（幼年時代）	11
記憶	22
父と母	25
第二章 大空とおく（小学校時代）	33
囲炉裏	34
校庭	40
田畑	48
季節の朝	53
後編 母をたずねて	145
第一章 惚れて通えば	147
出会いの地 出雲崎町	147
第二章 きんらんどんすの	147
芸者の地 燕市分水、弥彦村	207
きょうだい	65
二〇世紀	82
境内	91
第三章 さらば友（中学時代）	105
未知	106
収穫	116
別れ	129

第三章	六ノ町千式百拾参番地	
	生地 三条市	223
第四章	おいらん道中	
	ふたたび分水、弥彦	239
第五章	一枚の名刺	
	旭川市	271
第六章	きょうだいの音色	
	再会の地 浜松、米原	287
エピローグ		299
あとがき		301

【引用歌詞一覧】	.....	302
【参考文献】	.....	303
題字	山本敬子	
装丁・装画	佐々木こづえ	

## プロローグ

目を閉じれば、まぶたに浮かんでくる。

無数のホタルが光を放って暗闇に乱舞している。地からわくようにみえる。手のひらに乗せるとピカッピカッと、妖しげに、はかなく光った。あれは一体何色だろう。黄色、赤、青、紫？ どれも違う。絶対にコピーできない神秘の色だ。

耳を澄ませば、聞こえる。

「ほう、ほう、ホタルこい。あっちの水はーがいぞ」

村の向こうから返ってくる。

「こつちの水はあーまいぞ」

初夏の夕べ。浴衣姿の子どもたちが、うちわを手にホタルを追う。家の前を走る小道が、薄明かりにほの白く見える。小道の周りは一面の田んぼ。田植えから一、二カ月のまだ背だけの低い稲。涼やかに風が吹く。小波をつくっていつせいに揺れる。その葉や茎に点滅するホタルの群れ。遠くあっちでもこつちでも、幻想的な美しい世界だった。

故郷の村の夕闇に佇む六〇半ば過ぎの白髪たむすの男。閉じたまぶたを開くと、そこには漆黒しじくの闇があるだけだった。生まれ育った、あの懐かしいかやぶきの家は跡かたもなく、夏草

に覆おほわれていた。ホタルが数匹すうーと淡い放物線を描いて地から空に向かった。その天空からたしかに聞こえたように男には思えた。

埴生の宿も わが宿

玉のよそおい うらやまじ…

おお わが宿よ たのしとも たのもしや

たとえ「埴生の宿」(土で作った粗末な家)でも、大切な思い出の家。脳裏に六〇年前のわが家がよみがえった。両親と兄夫婦、その子どもたち。中学を卒業して東京に出るまでの一五年間を一緒に暮らした。貧しかったが、助け合って生きていた。

父は、男が五歳のとき鬼籍に入った。母が六四歳で他界したのはホタルの舞う六月二〇日だった。茫々ぼうぼうと三八年の歳月が流れた。昨年二〇一〇年一月、東京で定年退職を迎えた男は、すでに母の年を超えた。自分と家族が生きることには精いっぱい、母のことをかえりみることはなかった。

このごろ母の夢をよくみる。さびしそうな小さな後ろ姿に声をかけようとすると、母はいつも何も言わずに遠ざかった。

その母のことを、実はほとんど知らなかった。

母は、どんな人生をおくったのだろう。どんな思いで生きたのだろう。母は、幸せだったのか。

今は亡き母に会いたい。話したい。感謝を言いたい。

男は、子どものころに思いをさせ、母や父を訪ねる旅に出ることにした。

何が待ち受けているのだろう。

第一章 たらちねの  
(幼年時代)

一九四四年（昭和一九年）、新潟県三島郡西越村。

戸数約一一〇〇戸、人口約六〇〇〇人の小さな村にも、太平洋戦争は等しく押し寄せていた。

四月、米軍機の爆撃を逃れ、東京から二五世帯、七六人が縁故疎開で西越村にやってきた。まもなく学童疎開が始まり、親元から離れてきた約一四〇〇人の子どもたちが三島郡内の寺々や旅館で暮らした。さびしさと飢えに泣いた。

食糧不足は深刻で、農村でもなかなか白米は食べられず、わずかばかりの米や麦の入ったオカユが主だった。おかずもイモのツルや大根干しだった。おやつも、ほとんどなかった。寺や旅館の手伝いで山へまき集めにいっても、食べ物を探した。木の実や草を手あたりしだい口に入れ、下痢をした。

ノミやシラミにくわれ、かゆくてたまらず、しょっちゅう体のあちこちをひつかいた。頭にシラミがわき、丸坊主にされた女の子もいた。服を脱ぐと縫い目にびっしりシラミがたまっていた。シラミとりの時間があった。寺の廊下に並んでぶすぶすとつぶした。何匹とれるか競争をした。

世界では、ナチス・ドイツが残虐な侵略を続けていた。

第一章 たらちねの（幼年時代）

五月三日。オランダに住むユダヤ人少女アンネ・フランクは、ナチの目を逃れた隠れ家での生活を日記にこう綴った。

あなたも想像できるでしょうが、わたしたちはと  
きどき絶望的に、「戦争が何の役にたつのだろう？  
なぜ人間は仲よく、平和に暮らせないのだろう？  
この破壊は、いったい何のためだろう？」と、疑  
問をいただきます。

その四日後の五月七日。少年は、西越村柿木かきのきで農  
業を営む父・太左工門、母・トシの二男として生を  
受けた。

日本の敗色は色濃かった。学生の懲役延期の特典ちよつえき  
が廃止され、青少年の動員体制・組織の結成が相次

